

鞍賀多和長尾記

鞍賀多和長尾記

鞍賀多和長尾記

太永ノ比鬼^(大) 劔有田ノ住人崎山飛彈^(驛) 守家臣トテ弓矢二名高キ勇士有 先祖具二尋二
仁王五拾六代清和天王^(人皇) 御流八幡太郎儀家ノ舍弟加茂次郎^(三) 儀綱ノ息吉明^(義)ノ長子秋
山次郎^(義?) 吉宗ヨリ拾七代崎山造酒之丞吉時ヨリ九代ノ長子也 根來寺にて法躰有飛
彈^(驛) 入道西宝院源譽上リ申ケリ 御子四人持宣^(号?) 市^(二)ニハ姫三男但馬守家時甘壺^(才) 四
男弥四郎吉國拾四才弓矢打物取テ肩ヲ并者も無し 其外御一門三拾^(四) 人廣在中野村に
屋形ヲ健代々榮^(建) たまいけり 扱又家ノ臣下モ高牆^(垣?) 權平 湯淺孫八郎 三石八郎
沖三郎太夫トテ何連も名高キ兵なり 又但馬守の御めのうと日高郡小池村ノ住人吉川
佐太夫早虎ト申者有 長八尺五寸力八十五人賀ち加ら 眼ノ光り如星髮逆ニは^(え) 上
りいかれる音ハ猪そうの如鳴^(也) 崎山の御家にて今樊^(口に會) □とそ申けり 比ハ太永^(大) 永
年九月十八日市瀬次郎左衛門平馬にて馳参末不被聞召哉 扱々阿波淡路大將三好吉^(義)
長鬼劔二押寄所々ノ城責事度々成ト申とも 終に本意不達シテ此度ハ先崎山一類ヲ
責落シ^(攻) 并に畠山 湯川 玉置ヲ責^(攻)ントテ油良横濱に数百艘ノ兵船を掛 扱又門前
村二押寄寺田 西川 原 玉井四人ヲ討取テ寺領ノ百姓数百人池田山小坊子賀領^(を)お切な

らし乙^{オノガ} 國より切組材木ヲ廻シ俄二城ヲ健^(建)候 近キ御大事二候 されは以小勢大敵
防事難所ノ城二敷^(如ク)ハなく存候 如何被思召候哉と大息次^(吐いて)而被申けり 但馬守ヲ奉
始何も昨日より左様ノ沙汰承り候ト申けり 入道仰けるは誠家ノ大事此度と覺えたり
然者我領内日高原萩原富安三徳^(所)賀嶺續鞍賀多和長尾こそ四方難所ニシテ 敵何万
人責^(にて攻)とも落^(へ)扁^(へ)キ所二不有 殊二嶺二水澤山成地也 ミやうけん賀嶺ヲ本城二定鞍賀
多和より長尾迄陣屋掛ケ 兵糧籠に敵二色ヲ知らすなと 則奉行ニ市瀬次郎左衛門
畠山勘三郎 原源五郎 吉田新八 中津川兵太夫被仰付いそけくと仰けれハ 何も御
前罷立上ヲ下ヘトカへしけり 俄ノ事殊二四五日ノ間に拵シ城成は 松ノ皮ヲ其儘に
丸木健^(建)にぞ健^(建)たりけり 堀^(ホ)タリ廻シ^(堀)坪ヲ掛大木ヲ切而逆木となし城出來ト申上れ
は 但馬守ノ母上姫君式人御供には高墻藤太楠次郎ヲ被仰付 其外大剛の侍九人相添
い粉川へ落シたま^(ひ)いけり かりそめなから親子兄弟乃長^(わ)キ己^(わ)かれトハ 後にそおも
ひ被知けり さらはくト泣々己^(わ)かれたま^(ひ)いけり 上下泪ニむせびけり 無定世そ
かなしけれ 大將御座ヲ立たまへは但馬守御同舍弟弥四郎君 崎山太郎左衛門 同新左
衛門 崎山主水 同左近 同弥七郎 楠三郎正直 崎山鳥羽守御一門三拾四人 高墻權平
吉川佐太夫 湯淺孫八郎 三石八郎 沖三郎太夫 鹿瀬五郎 中村源八ヲ初トシテ其勢八
百騎 鹿瀬小峠より嶺通りニ長尾ノ城二入給ふ 日高二八市瀬三郎 市瀬四郎 畠山勘

三郎 同四郎 同助八 阿波田次郎 (栗田?) 関鳥佐近之太夫 高家佐右衛門 吉田新八 佐藤三郎
左衛門 玉置彦太郎 假(屋)や孫六 中津川兵太夫 芝山七郎 潮行主膳其勢五百三十騎長尾
の嶺に走登り 役所役所かためけり

飛彈(驛)入道家正弥四郎君御供にて長尾ノ場馬(馬場)に御出有 役所ヲ不殘御覽有天晴城ノ構

金剛山ト申とも是ニハいかて可増されは合戰ノ習大勢トテ不可恐 また小勢トテあな

とらす 急(窮)鼠却而猫ヲ喰たゝ味方の心ヲ可合 敵寄來ハ矢比に近付射手落せ(て) 大

勢續而込登ハ大石ヲ崩掛テミぢんこせよ 大將ト見は射手落せ(て) はむ(葉武者)しやとも二目

なかけそ 我一戰討勝は 方々の味方可來 人ハ言代名末代いさめやく旁くト諸

勢ヲ勇諫給ケリ 扱また弥四郎君ヲちかへ召れ役所く(ゝ)の幡ノ紋不殘をしゑ(ゝ)多まい(ゝ)

けり 先鞍賀多和の少こなこに三つ巴ノ向幡中津川兵太夫 上り藤ハ吉川佐太夫すそ

黒に蔦葉の白幡崎山太郎右衛門 同新左衛門 (洲濱)すなまの赤旗玉置彦太郎 上羽ノ蝶ハ阿

波田次郎 扇ニ日丸付たるハ假屋孫六也 丁字巴ノ白幡高牆權平 竹に雀ノ旗佐藤三郎

左衛門 扇ノ丸ハ市瀬兄弟 三がい松小松原ノ一等也い (ほ・庵)おりに葛葉ノ幡ハ原源五郎

きく水乃白旗は楠三郎 所々に葛葉の幡三拾四流(旗)崎山一家ノ旗そかしまた左の内ニ

三ツ星の白幡ハ潮行主膳 其外家ゝの紋白幡赤旗馬印ハ百三流(旗) 其勢式千三百人 寄

敵今やと待居たり

定 条 々

一 今度之合戰二拔^(駈)欠堅仕間敷事

一 夜廻り無油斷可^(精)情入事

一 夜討入時^(者・は)煮相圖之火可立事

一 城内出入之輩堅相改可申事

一 恩賞者^(は)其忠仍可行事

一 敵方得通^(候?)シ仕者於有之者^(は)何歳過とも尋出シ重類可頭切事

右之条々堅可相守者也

太^(大)永弐年午ノ

九月

源 家 正

此所札立ト申也

三好吉長此由見テ油斷シテ長尾得^(候)籠シ口惜や
無二無三責^(攻)落せト弐万騎ヲ三手に分

け岩谷より富安迄取廻しけ連とも 山高うシテ谷ふかく道細く 鳥もかよ己ぬ難所
なれは 城ヲ見上ケ控けり 中二も岩ノ谷口ノ寄手とも何程ノ事力可有トおめきさけ
びテ責登リケリ 城ノ兵坂中迄下リ立究 立見ノ射手数百人矢さきお揃射たりけり
寄手ハ三百餘りも射ころされ 少ひるミて見得にけり 城之兵態トよ己くと引上
ケレハ 寄手是にちからゑて 敵ハ小勢成そ 續や旁々ト下知シテ込入けり 思儘
に引寄相圖ノ貝ヲ吹立けれハ 并置たる大石壺度とつと落しけれハ 人馬千餘リミち
んこ成而死にけり 手負ハ数も知れさりけり 左右之嶺ニ立并手たゝきテ笑けり 寄
手は討れ音もせず大將下知シ 此城力責には叶まし 此陣ひけやとテ跡おも不見シ
テ逃ニけり 軍神ノ血祭り吉ト勝時三度上げ而城中得引かへす
扱も城中得人質ニ被取シ女わらん扁共日々夜々の合戦に 親ヲ討せ兄弟ニわかれな
けきかなしむありさま見るに心も消ぬ扁し 市瀬次郎左衛門賀息女十壺才になりけ
る賀 旁降り四方も見得されは嶺より見落とし

* 『由良町誌』資(誌) 料編には霜とあり

鞍賀多和かくす秋きり心せよ我古里わ 見てもこひしき

崎山鳥羽守の息女おせん

ひき寄て首かき落せ鞍賀多和 名わ後の世にあけまきの袖

中津川兵太夫賀息女おきく十五才 兄兵助討死トきゝて なくくよミて母のかたへ
送りけり

きのふ見し人も名はかり今日わなし 鞍賀多和ころ志ての山なれし
中津川兵太夫賀妻わ崎山飛彈守家正乃御妹おきよ殿と申せしなり

末ノ尾山上下取出合戦

富安口之寄手とも岩賀谷合戦ニ寄手多勢討れ 城中弥勇おなし寄手ヲあさむく駄見
テ 軍評定はかりにてミ日のあいた控け里 久米河源左衛門申やう 左様に難所ヲ
おちて軍之穿儀計にてハ戦事ハ不可有 續や旁々とまつ崎 欠テ登りけり けつき
に勇若侍千餘りすゑの尾よりも責登る 城中少もさわらす居たりけり 寄手彌勇ヲ
成シ峠ニ上り木戸口迄詰寄 時音ヲ上ケ逆木ニ取付とも城中更に不驚 寄手ハ壱面
ニ立并 只引破れト鹿墻ヲ引やふり 塀下迄寄付たり 城中よりは見テ大木の釣縄
壱度切而落シ矢さきお揃へ射たりけり 押打れ武三百人死たりければ あわてさわ
きシ処に 吉川佐太夫 中津川兵太夫 其勢ハ三百人欠出し爰せんと不戦防けり 吉

川壺丈五尺ノ鉄棒にて阿たる者を幸とはらりくとなきふせたり 寄手又貳百討れ叶ましと坂下へ我先にとくすれて引にけり 吉川是見てからくト笑さもそうすく崎山御内ニ今樊(口に會) □ ト阿(た)さ名呼ス 人喰鬼の有トわ不知や 濡手にて粟を津かまんとはるく寄シ人々の迹さま見よとそ笑けり

吉川佐太夫夜討之事

扨も十月二日の夜雨風はけ致しシテ 方々のかゝり火も消けれハ吉川申やう いさ此まきれに夜討ニ出敵ヲ起シテ一慰ト 玉置彦太郎 芝山七郎 楠三郎 潮行主膳以上五人密ニ城お出(を)にけり 麓ニテ松明焼ぢんやくニ火かけたり 夜討こそあれ餘さしと騒動シテ欠廻(軀)リシヲ 小影よりもかけ出 三好五郎賀首打落し其外名字ノ侍拾五人討取安内(案)己能知(は)りたり 巢原山より心靜に引上ケ 此所ヲ引尾トハ名付たり 其夜寄手味方打シテ八十四人死たりけり

但馬守討死之事

扱も寄手大勢成ト申とも 流石名高家正に壱人當千ノ兵難所ノ城に籠りけれハ 責^(攻)
あくんテ控けり 爰に宮崎上野守本うく順見シテ丑内大平こそ究竟の寄口なりト案
内者^(は)四宮五郎に先陣させ 其勢五千計も込入ケリ 如案大平道廣くして長尾迄大道
有 今日此城責^(攻)落さすは 三好家のち志よく成と 追立追立責^(攻)入けり 此手の大將
但馬守家時御覽して 千騎賀壱騎に成迄敵に長尾を越すなと下知シたまへは 承候と
三石八郎 鹿瀬五郎 眞先^(かけ)欠^(か)て戦シ賀数ヶ所ノ手負猶敵の手にかゝらしと忒人捨ち賀
へて死にけり 城中貝を吹立大鼓ヲ打 今日ヲ最後ト思ひ切テ走り加り込登る大勢ヲ
迫下シ迫落シ壱足も不引 親被討とも子不助 子討れとも親販り不見シテ死骸ノ上ヲ
乗越テ十月五日巳ノ刻ヨリ未ノ刻迄七八度防戦ける程ニ 敵も味方も数ヲ盡シ討れケ
ル 大將但馬頭高キ所へ欠^(駈)上り軍ノ下知シたまいし賀^(ひ) 流矢來而内甲に立 大事の
手なれは かつはと伏たまう^(ふ) 松沢五郎是ヲ見テ首ヲ取らむト志寄ヲ起直り太刀ヲ
抜キ五郎賀跡^(後)脚なきすへ アゝ口惜やはかりにて廿壱才ヲ最後トシ長尾ノ露ト消
たまう^(ふ) 阿波由次郎是ヲ見テ 今者^(は)何を可致ト大音上ケ 日比鬼^(紀)弱ニかくれなく
鬼神やうに聞ゑ^(え)し阿波田賀 今日最後なれは手并程ヲ能見置 末代之物語にせよと
呼り多勢の中得^(へ)わつて入 忒尺八寸ノ太刀まつ^(真向)こうに指しかさし切テ廻り十七騎切

伏 太刀打 お^(を・折)れて大手おひろけ 取テハ投取テハなけ十四五人迄投たりけり 爰
二増山次郎 川嶋七郎と申大力の勇者左右よりくミ付を両ノ脇に挟ひとり 行もさび
しきに 己^(おのれ)ら供せよと ゑいと^(締)式人目口よりち^(血)をは^(吐)きて死たり 其時大勢欠^(軀)
寄テ終に首^(を)おそ討れケリ 上野守但馬頭の首ヲ取崎山但馬頭ヲ宮崎上野守討取シト
高聞呼^(声)セリ^(は)ケリ 吉川佐太夫早虎搦手末尾ノ寄手ヲ坂下得^(へ)迫崩シ 大手合戦急成
由聞テ大息次^(吐)而走り來り 何我君討れさせ給ふとや 己上野め縦は天ヲ欠^(軀)り行とも
退さしと壹丈五寸ノ鉄棒にて黒煙立散々に打ふせたり 上野下知シテあれこそれいの
佐太夫成 高名ふかくも敵による此陣引けと谷口指テ引ニけり 吉川八町賀内ニテ早
キ馬にも追付程ノ者成ければ 終ニ追詰馬の跡^(後)打すへ上野賀甲ノ上拜^(をがみうち) 打にうちけ
れは 首わ胴ニそ入ニけり^(ゐ) 但馬頭ノ御首ヲ取上御懷^(へいだき) 上ケテ 扱も無情御顔は
せや佐太夫ト被仰ぬナリト 伏シまろび身ヲもたへ音をあけてそ泣居たり かくてい
叶^(に)己シト御首ヲ袖に上ケ乍泪に本城ニ歸リケリ 此所ヲ合戦坂ト申成 本城成シカ
ハ入道乃御前に参上シテ御首ヲ指上ル 皆々袖ヲ濡シケリ 弥四郎君但馬頭ノ御首ヲ
御覽有 扱々早くも替えらせたまう^(ふ) 御顔はせや粉川にまします母上姉君達聞召ハ
嚙々なけかせたまう^(ふ) 偏^(し)き 弓矢取身わ立^(は)わかれ行ヲ限リト兼テ思ひ置ぬれト 今
更己かれ可奉トハ思^(は) さりシなり 口惜の中と御泪せきあへす 家正御泪ヲ留め誠

佐太夫なかりせは首ヲ敵二被取 今更見る事あらし速に死骸首能々可納也 并死骸の中ニも阿波田賀事母におくれて子もなく残るハ名のミ計成不便ノ者乃心指何世二か己(は)わすれんと御座ヲ立せまい(ひ)ければ 本城北谷にふかくそ納申けり 其外御一門の御死骸此所ニ納置世納而後 おもひく引納る也 去仍此城ヲ但馬賀城とも申なり

鳥羽頭討死ノ事

明レハ十月六日辰刻儀(義)長七百騎本城表ニ押寄時(開)ノお上ケたり 城中とも三百計欠(駈)出シ 大將崎山鳥羽頭 藤堂伊豆守 笠松兵部之太夫三手二巳(む)かれ三方より取包而責(攻)戦家正城より御覧シ而 敵多勢成そ鳥羽守討すなと宣ハ高牆權平 大谷九郎 高家佐右衛門百騎計欠(駈)出シ 敵ヲ難所惡所ニ追落シ散々射たりけり ミかたは案内者 寄手は案内不知惡所難所ニ押落され 過半被打叶シとや被思けん 西ヲ指而ゆく 阿ますな討てと下知シ而迫而行 萩賀多和の峠にて鳥羽守大音上ケ きたなし吉長何(義)まで敵ニ後ヲ見するぞ かへし合て勝負をせよ かやうに申ハ今日ノ大將崎山鳥羽守敵ニ不足ハあらし かへせくと宣ハ儀長(義)も萩賀多和之峠にて駒引かへし 爰にて討死

せよと下知しけれハ 主を討せしとかへし合戦ノ所へ 三好賀城より新手ノ勢走來
峰より火煙ヲ出シ面もならず戦けり 鳥羽ノ守六騎打取七八騎二手負馬より落たま
う(ふ)を大谷九郎切拂鳥羽殿ヲ肩ニかけ 味方の陣ニ引かへし木影ニおろしま(あ)いらせ
其身も息ヲ次居たり 鳥羽守城ノ方御覽し念佛五六遍ん唱城ヲ拜シ志ての山にてと計
二而終事きれたまい(ひ)けれハ 大谷九郎また肩ニかけ城中へ引かへす 笠松兵部之太
夫大勢中ニ戦シ賀三好六郎賀首を取而引かへす 藤堂伊豆守も敵ノ中へ欠入(駈)而吉長
賀乗たらし馬の平首打落シ屏風毛だうと落首を打んとせし所に 森平八欠合討而之
間ニらうとうとも吉長(義)を中ニ取(包)而其あい遠く落延たり 猶追かけんと志たまう所(ふ)
へ高牆權平跡鎧を合欠(駈)來而今日捨させたま已(は)て不叶御命賀大殿ノ御大事ヲ御覽せん
と被思召すやとかけさせ奉禰(ね)は 吉春も無力泪をはらくトなかし 昨日は但馬頭
ニおくれ今日ハ眼前に兄鳥羽殿を討せ 我手ニ入シ敵吉長(義)を討もらしぬる事ハ能ク
弓矢ノ冥賀(加)に盡ぬる賀トはかミなして引たまう(ふ) 末代迄も名の高き藤堂ノ元祖君也
高牆權平丁子巴ノ幡をなひかせ味方ノ勢ヲ引上ケ見れば纔六七拾人 皆うす手少々
負ぬハなく皆ひを(緋 緘)としに染なし あけ(朱)に成る引かへす恐かりし戦なり 去依此所を陣
賀原と申とかや

鞍賀多和落城ノ事

扱も但馬守前二崎山太郎左衛門 崎山鷹入道 同左近之太夫 阿波田助五郎 森源五郎
阿波田次郎 鹿瀬五郎 芝山七郎 三石八良 畠山助八ヲ初トシテ味方七百三拾騎 露谷
大平ノ嶺長尾ノ合戦に討れ本城表ノ合戦二崎山主膳 崎山鳥羽守討死 其外度々の戦
に五拾騎三拾騎宛討れける程に纔今已^(は)そう兵式百人ハ過ぎざりけり 城中もたもち
かたくぞ覚けり 弥四郎被入道ノ御前に参仰ける己^(は) 此城難所ヲ頼計にて三方ヲ敵
に搦られ纔に今は雑兵貳百人ハ過す候 又待候とも助味方も候ましされは命ヲまつ
と^(た)うし本意ヲ達ヲ名將トこそ承候得ハ 何方得^(へ)も御ひらき有テ重而御幡ヲ揚給い^(ひ)
三好お討取たま^(を)いなハ草影成兄上も嘸や悦給ふへし 如何被思召候哉ト仰ければ
入道志はしは返事もなく 御泪に暮多まい^(ひ) 志賀能申たり 弥四郎我等も左様に思
ひし賀とも老人乃我命惜シミ何かせん 又ハおこと賀心底も愧敷只此城枕トシテ討死
と思定シ賀とも 一門皆々討死せは崎山ノ孫子此所にて絶也事ころ愁ケル 然ハ此夕
月ノ入比城出壁な里 馬ともお追放せ^(を) 敵風上ヨリ焼討にすか また夜打に寄事も
可有そと下知シ給得^(へ)は 皆々人質に取置シ女己らん扁おもひく心々に落シケリ

哀とい己^(は)むかこそなき弥四郎被仰シハ此山城の名残も今日ヲ限りそや いさや名残
お^(を)をしまん 誠に一時之榮花ハ千歳延ル各々心靜成内いさや名残惜まん 夫々下仰
ければ高牆權平御盃ヲ持出テ入道ノ御前に置末々下々至迄 今わ何^(は)おか惜む^(を)扁^(へ)き
吞屋舞うたへや思ひ指そと多己^(は)むれて其日も既に暮にけり 月山のすに入給へは時
分能そ旁々ト大將御座ヲ立多まへは 一門拾六人御供申出にけり 弥四郎君鎧の上に
淺黄いにて肩ニ蔦葉^(を)お縫せたる黒き小袖ヲ被召 式尺三寸そうらいし鹿瀬丸ト申
重代ノ太刀ヲはき 高牆權平 大谷九郎 沖三郎太夫 吉川佐太夫早虎御供申出にけり
大永武年十月七日の夜長尾ノ城出熊野地へ落多まう^(ふ) 松瀬川ノ水増シ 雨降り前後
暗シテ行先更見得されは如何せんとおもふ所へ 老人臺人童子臺人松明燈我々道ヲ
凱^(輝?)申さんト武人跡^(後)先に立ちければ白晝乃ことくなり 人々悦川瀬ヲ安渡り行程に
夜もほのくと 明方に印南ノ浦に出にけり 其時^(こゝろ)音ヲ阿け我ヲ誰れと思らん 老
人ハ汝良^(る)賀氏神八幡宮ノ神使也 又童子ハ汝良賀頼ヲ掛シ山ノ主 猶行末可守ト乃
たまう^(ふ)御音諸ともに西ノ空に飛たまう^(ふ) 不思議ト言もあまりあり 人々難有シト御
跡^(を)お拜し 心中二頼敷難所越テ熊野成河内村塩野里勝山ノ城に入りたまう^(ふ)
扱ハ三好吉長^(義)大勢討れケルとも 但馬守ヲ討取喜悅限ハなかりけり 急に城ヲ責落
せト案内 野田太郎に尋テ水越ト申所^(を)お通り 鹿瀬峠ヨリ嶺通り鞍賀多和木城迄責

入 陣屋く^(開)に火掛時ノ音ヲ上ケにけり 比ハ十月九日卯ノ刻計に西風稠敷吹けれ
ハ片時之間に焼拂 然とも三日前に落行臺人もなかりけり 扱ハ何國へか落ぬらむ
まつ目出シ珍重と則廣在中二代官ヲ置テ 小坊師賀城に種松殿ヲ殘シ置阿波に帰陣有
いよく^(攻)鬼刃責取らむと軍ノ用意ト聞^(え)へけり 種松殿成人ノ後三好義迷^(繼)ト申也
去仍此城ヲ種賀城トハ申也

崎山飛彈^(驍)頭入道西宝院 同弥四郎 吉國勝山ノ城ニ入たまへは右馬太夫悦事限なし
其外安宅 小山 小松原何も好^(誼) 身なかけれは能々いた己^(は)り奉り 其比副將軍宮内少
輔政春公熊野湯川ニテ 御病氣以外成シかは色々御療治被成 少々御快氣成けれハ何
れも安堵ノ思ひをなしにけり 然共小松原龜山城直光公御持堅固御座候由 日々往還
仕候處に 飛彈^(驍)頭方より高牆權平使者にて鞍賀多和長尾ノ合戦但馬守討死ノ次第ヲ
具ニ申上たまへは 神妙にて御働可申やらも無之候 我等病氣能候へは近々打立可申
旨御返事有 御暇ヲ被下權平塩野へ歸りけり 又畠山宮原ノ城ヲ責被破保田 貴志ト
壺所二成而合戦之由告來シかは河内へも御飛脚被遣 大永二年十月廿六日ニ湯川ヲ御
立有 其勢八百五十騎にて同廿八日午ノ刻小松原ノ城ニ入給へは 上下悦其風情浦島
太郎賀七世ノ孫二逢けるも是には過しと見^(え)へにけり 河内國畠山高國ノ諸勢湯淺二
付ト聞シかは 紀門ノ軍勢志集り其勢五千ト聞得^(え)けり 霜月十日小坊師賀嶺ヲ取廻

し政春 高國兩大將にて數度戰はかり事おめくらし 小坊師賀城ヲ乗取三好ヲ西海二
追拂其後三好ト度々合戰有 直光公河内國若江郡にて三好義迷ト戰討死有之也 飛
彈(驛)入道家正其時より一家湯川ノ簷下成而一門三十四人本領廣在江歸(ハ)リ武拾四村納シ
也 又日高郡原村萩原 高家 富安半分 蛇尾 中津川 小池村納(治)而萩原 東光寺に屋形
ヲ健(建)又東ノ嶺に遠見番所健(建)而番人晝夜被置シ也 此所ヲ城賀嶺ト申成 大永三歳と
健天文ノ比迄東光寺ノ町千軒餘りの所也 阿波田次郎怨靈長尾より光物ト成而飛來リ
諸人にうらミおなし 諸人多く煩事有而阿波田大明神トい己(は)ひ 霜月廿三日祭礼な
り

一 油良(由) 衣奈堺寺山辺二長尾ノ城ト申所有之 此所ヲ長尾越ト歌ニ讀なり 是ハ文
明ノ比崎山越前守畠山合戰有シ所なり 去仍長尾記二種可有不可論 何れも日高郡ノ
内也 然とも油良長尾鞍賀多和長尾ト申別也 又海士郡木本にも長尾城ト申所有之
池田山小坊師賀城合戰ノ次第泉劔 河内 紀劔三國ノ武士討死高名生捕數多別紙有之
三好義長義迷(繼)小坊師城ヲ退出 花々敷合戰シテ吉長大引より舩にて退 また吉迷(繼)
ハ小引ヨリ退去 去仍大引 小引ト申也 其比ハ親引子引ト申せし成
右者崎山弥五郎子孫所傳之ために書之記者也

抑々崎山ノ家ト申ハ 仁王(天皇)五拾六代清和天王(天皇)ノ御流八幡太郎儀家(義)ノ舍弟加茂次郎儀綱ノ息吉助長子秋山次郎吉宗ヨリ拾七代崎山造酒之丞吉時より八代崎山越前守ノ長子飛彈(驍)守家正紀昐有田郡廣在貳拾四村 日高郡原谷 萩原 高家 富安半分三所 蛇尾 中津河 小池村之領主 有田中野村二居住也 家正七拾貳才にて三好儀長(義繼)儀迷ト戰太(大)永貳年二高家庄鞍賀多和城籠合戰納而後太永三歳より東光寺二屋形ヲ健(建)而居位也廣崎山ノ元祖也

天(大)永六年

男子貳人 但馬守家時
弥四郎吉國

西室院源譽居士 俗名崎山飛彈(驍)守家正

戌十一月十一日 宝

女子貳人

崎山鳥羽守家利

崎山主膳之太夫吉清?

家正弟五人

崎山主水之助吉忠

何れも紋葛葉

笠松兵部之太夫儀勝

藤堂伊豆守儀春

三代崎山弥四郎吉親ちか

女子三人男子四人内二人原谷村二住す

但拾四才にて鞍賀多和ノ城ニテ籠搦手末尾ノ大將也

三代崎山弥五郎

男子三人孫左衛門 女子三人
弥次右衛門

但拾六才にて直光公御供申河内合戦より天正十三歳迄拾幾度戦場出高名有

四代崎山弥左衛門

男子三人女子四人内壱人狐賀淵にて死成

十一才の由也

但十八才より名嶋合戦ノ高名有 天正拾四年より浪人シテ皆百姓成ル也

五代崎山梶右衛門

男子九人

此梶右衛門東光寺より和歌山能登丁へ引越位居致候處弥次兵衛成人之時萩原巢原へ引越家ヲ建ル

六代崎山弥次兵衛

子無し 畑ヶ中弥次兵衛三男ヲ養子ニ致

此弥次兵衛口前役所相勤メ

七代崎山弥左衛門

男子貳人 惣領六才ニテ死
二男次助
女子一人 拾壹才ニテ死

此弥左衛門ハ笠松弥次兵衛ノ三男

養子ニ來リ久保へ家ヲ引立ル

八代崎山次助 文化五辰九月十五日病死 生年七十二才但子なし

九代崎山弥左衛門

此弥左衛門□□□□右衛門之子也

後 書

一 本書原本は内原村萩原崎山信吉氏が所蔵する所にして、森彦太郎先生これを謄寫印刷となし同好の士に煩ちしものなり。

余 之を由良町阿戸濱上楠松翁藏のものより転寫す。

一 本書果たして日高中世の資料として如何程の價值あるものなりや未だ知らず。然れども本書記載の如き大事変に際し、當時の本地方の土豪湯川氏の態度等一読して甚だ腑におちざるものあり、期して後日の考究にまつ。

昭和貳拾六年参月拾貳日

清水 長一郎誌

活字化を終わって

この『鞍賀多和長尾記』多分『日高町誌』に記載済みだろうとそのままにしていたが、『日高町誌』記載なく、写本を始め大半を終わったところで、『由良町史』誌資料編に活字化され載っているのに気付き、今までの苦労は何だったのだろうと悔やんだ次第です（『由良町史』は日高町崎山新二氏所有とある）。父の写本は後書きの通り、崎山家伝来の古文書を森彦太郎先生が写本・濱上氏の所蔵の写で、森先生の加筆か父の追筆か沢山のルビが付けてありそのまま活字化した。

平成十九（二〇〇七）年六月十八日

清水 章博